

オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的發展

呉羽正昭

筑波大学生命環境系

本研究の目的は、オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的な發展にみられる諸特徴を明らかにし、それらに係わる要因を探ることである。オーストリアアルプスにおいては、海拔高度が高く、大規模なスキー場を有するスキーリゾートで継続的發展がみられた。とくに、4・5星宿泊施設における宿泊数の増加が顕著で、施設の高級化も進んでいる。さらに、多様な施設やサービスに基づいてスキーを「楽しむ」ことのできる空間としての性格を強めている。しかし、伝統的な高級リゾートは停滞傾向にあった。スキーリゾートの發展を支えているのは、ドイツやオランダに加えて、近接性に基づいたスイスや東ヨーロッパ諸国からの宿泊数増加である。さらに、特定の出発国からの顧客が特定のリゾートを好み、継続的に訪問している。これらの背景には、オーストリアのスキーリゾートでの滞在費用が、スイスなどと比べて安価であることが指摘された。

キーワード：スキーリゾート、観光、發展プロセス、オーストリア、アルプス

I はじめに

山地は、ツーリズムの重要な目的地である。世界の多くの人びとは日常的に都市で生活しており、さらに都市は、一般に平地に立地する傾向が非常に強い。つまり、多くの人びとにとって、山地は日常生活圏とは異なった環境なのである。アルプスは、多くの人びとが生活する大都市から遠隔であるとともに、高山という特殊な環境を有している。

ところで、ヨーロッパでは産業革命以降、都市への人口集中、都市の環境悪化といった現象が生じると同時に、アルプスはバカンスの目的地となっていった。第二次世界大戦後、1950年代になると、アルプスでは夏季のマス・ツーリズムが生じた(呉羽, 2014)。それから15年ほど遅れて冬季にもマス・ツーリズムが到来した。1970年代以降は、アルプスにおける夏季のツーリズムは海岸観光地との競合などによって停滞傾向がみられる。それに対して、冬季の場合には、ヨーロッパ内には競合する地域がほとんどなく、また、

1990年代以降も一部の地域で冬季のツーリズムは發展を続けている。

ところで、本研究が対象とするオーストリアアルプスでは、冬季におけるツーリズムの發展傾向が顕著である。それはスイスにおいて冬季の宿泊数が1980年代以降停滞していること(呉羽, 2014)、フランスのスキーリゾートもさまざまな問題を抱えていること(Tuppen, 2000)、アメリカのスキー関連産業が1980年代後半から停滞したこと(Scott, 2006)、などとは対照的である。もちろん、日本においてスキー観光全般が不振であること(Kureha, 2008; 呉羽, 2009)とも大きく異なっている。

オーストリアにおけるスキーリゾートの發展に関しては多くの研究がある。たとえばKureha(1995)は、自然条件に恵まれること、相対位置や類似文化による関係に基づいてドイツ人という長期滞在型顧客を多く受け入れ可能であったことが主要な發展条件であることを指摘した。さらに1990年代半ば以降は、東ヨーロッパからの新しい顧客を獲得して發展した点(Kureha, 2004)

も解明されている。

ところが、現在、オーストリアにおけるスキーリゾートに関する研究者の関心は、温暖化との関連をみることにあるように思われる。たとえばアルプス全体 (Abegg et. al., 2007) やオーストリア (Steiger and Stätter, 2013) において、温暖化の進行とともに標高の低いスキー場が経営困難になるであろうことが指摘されている。逆に、Töglhofer et. al. (2011) は、標高の高いスキー場では、これまで積雪の年々変動の影響をあまり受けてこなかったことを示した。温暖化の影響下では人工降雪が注目され、その利用についても多くの分析がある (たとえば、Steiger and Mayer, 2008)。一方、Steiger (2011) は、少雪であった2006年度シーズンについて、スキー場経営の脆弱性を分析し、その脆弱性は標高の低い中小規模のスキー場でみられることを指摘した。

Steiger (2011) のように、スキー場経営を分析対象とした研究は少ない。例外として、Falk (2013) は、オーストリアにおいてもスキー場の閉鎖がみられることを指摘し、索道経営会社の生き残り条件を検討した。その結果、人工降雪システムを早く整備していると残存すること、平均標高が1,700m以上のスキー場では閉鎖リスクが小さいこと、経済的な不況の時期では閉鎖リスクが高いこと、積雪深と閉鎖とは有意な関係がないことを明らかにした。また、Falk (2010) は、スキーリゾートの宿泊客数の変動に大きく影響するのは、スキーヤー出発国のGDPであること、復活祭による休暇開始時期が早いほど多くの宿泊客数をもたらすことを指摘した。

しかし、オーストリアのスキーリゾートが全てではないにしろ、これまで継続的に発展している傾向を追求した研究はほとんど無いと思われる。そこで、本研究は、オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的な発展にみられる諸特

徴を、全国レベルでの分析に基づいて明らかにする。さらに、発展が継続的である要因を探っていく。

まず、冬半期宿泊数の推移について全国レベルで明らかにする。オーストリアにおける冬半期宿泊数はほぼ一貫して増加してきたが、本研究では1990年代半ば以降の増加傾向に注目する。というのは、後述するように冬半期宿泊数が1990年代半ばに一度停滞傾向を示すこと、また1990年までの状況はKureha (1995) で解明されているためである。また、冬半期宿泊数について、宿泊施設の種類別にみた数値、宿泊施設のベッド数なども用いてより詳細に分析する。

第2に、主要なスキーリゾートの動向を分析する。具体的には、首都および州都を除外し、3年平均で2012年冬半期宿泊数の上位30位のゲマインデ¹⁾を主要スキーリゾートとする。3年平均としたのは、宿泊数の推移にみられる突発的な変動によって結果がゆがむことを避けるためである。それらについて冬半期宿泊数の変化、宿泊施設の種類別にみた同数値の変化、それらの地域的分布、スキー場の規模や垂直分布を検討する。さらには、顧客圏に関しての分析も加える。最後に、これらの分析結果を合わせて相互に検討するとともに、継続的発展の要因について地域的な視点から検討する。

主たる分析に使用した統計データは、オーストリア統計局 Statistik Austriaが毎年刊行している『オーストリアの観光Tourismus in Österreich』である。この統計の詳細については呉羽 (2002) が参考になる。これらのデータの一部は、オーストリア観光局 Österreich Werbungが提供するデータベース TourMISにも含まれており、このデータベースも使用した。ただしゲマインデ単位のデータについては冊子体を参照した。また、オーストリア観光局による市場分析結果も利用し

た。

本研究はスキーリゾートの動向を分析するために、冬半期の統計データを使用する。これは表記年前年の11月から表記年4月までの期間を指す。一方5月から10月までは夏半期である。本研究でいう年は、冬半期と夏半期を合わせた1年で本来ならば年度ではあるが、本文・図表中での表記は単に年とする。

またスキー場に関しては市販のスキー場ガイド(Fritz und Fettner, 2013)を利用した。本研究でいうスキー場はアルペンスキーを対象としたものとし、クロスカントリースキーに関しては考慮していない。

II オーストリアアルプスにおける宿泊数の動向

全国レベルで宿泊数の推移をみると(図1)、1950年代から60年代にかけて夏半期の宿泊数が急激に増加した。しかしその後は増減はあるものの7,000万泊レベルで推移し、1990年代前半に大きく減少した後で6,000万泊レベルにある。一方

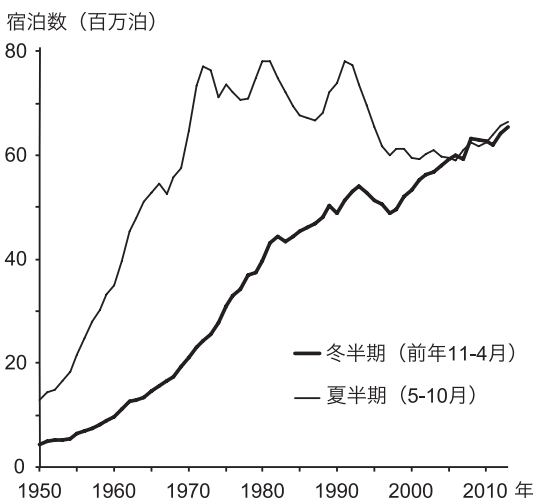


図1 オーストリアにおける宿泊数の推移
(1950 - 2013年)

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich (年刊)

冬半期では、夏半期よりもやや遅れて1960年代半ば頃から宿泊数が急激に増え、1980年代には増加率は弱まったものの増加を続けていた。1990年代半ばに一度減少傾向を示し1997年と1998年には5,000万泊を割りこんだが、その後は再び増加しており夏半期と同レベルの宿泊数に達している。

ここで示された冬半期宿泊数は、スキーリゾートにおけるものだけではない。とくに、近年のヨーロッパでは都市観光が急激に成長しており、オーストリアでもその傾向が強い。ただし、冬半期という期間では、都市における宿泊数は夏半期に比べて少ない。2013年冬半期の国内州都の総宿泊数は約790万泊(同年夏半期は1,130万泊)に達するが、同時期の全国宿泊数約6,560万泊の12%を占めるにすぎない。そのほか、温泉地も複数存在するが、スキーリゾートが温泉地を兼ねる場合も多い。それゆえ、残りの大部分の冬半期宿泊数はスキーリゾートで生じていると推測される。実際に、主要スキーリゾート(冬半期宿泊数上位30位のゲマインデ)の冬半期宿泊数は、2013年で約2,100万泊に達し、全体の32%を占めている。

これらの主要スキーリゾートにおける近年の冬半期宿泊数増加を把握しておく(図2)。ここでは宿泊施設の種別に変化をみる。オーストリアにはさまざまな宿泊施設があるが、一般的な宿泊施設は規模で大きく分けられる。11ベッド以上の施設は商業経営体としての経営、10ベッド以下の施設は小規模経営とされる。前者には、産業院(Wirtschaftskammer)のホテル部門による星の数(1から5)に基づいたランク分けがある。これらの施設のほかには、ユースホステルや療養施設、キャンプ場などがあるが、まとめて「その他の宿泊施設」として扱う。図2によると、近年ではやや停滞傾向にあるが、1990年代後半から

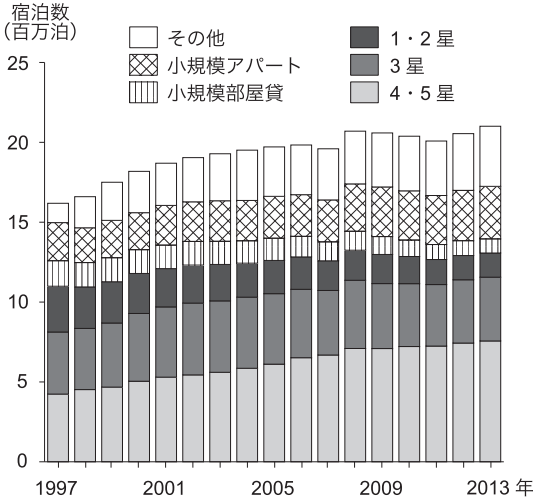


図2 宿泊施設の種類別に見たオーストリアの主要スキーリゾートにおける冬半期宿泊数の変化（1997－2013年）

表2に示された30カ所のスキーリゾートのみを示している。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）

ほぼ一貫した増加がみられる。最も目立つのは宿泊施設別の増減の違いであり、最も高級な4・5星クラスでの冬半期宿泊数は一貫して増加している。それは、最近約15年間で1.8倍に増え、全体の3分の1以上を占めるようになった。小規模経営のアパートメントメント *Ferienwohnung*（休暇用住宅²⁾）についても増加がみられる。アパートメントは、一般の住宅のように機能別の部屋を有し、自炊が可能である。加えて、図2では「その他」の増加も目立っているが、全国における動向から判断するとその大部分は11ベッド以上のアパートメントであると推測される。逆に、安価な宿泊施設に位置づけられる1・2星施設と小規模部屋貸では冬半期宿泊数の減少が顕著で、1990年代半ばのレベルの約半分に減少した。

ここで示した数値は宿泊数であるが、それに対応するように宿泊施設数やベッド数も種類ごとに変動している。ただし、上位30位のスキーリゾート

ト全体では、施設数とベッド数の総数の変動は、ともに最近約15年間でほとんどない。ちなみに2013年の施設数は約1.2万で、ベッド数は23万である。

最後に、宿泊客の出発地に注目する。オーストリア全国の冬半期宿泊数（2013年）では、出発地の約40%はドイツが占める（表1）。次いで、オーストリア23%、オランダ8%であり、イギリスとスイスが3%台で続く。その変化は、出発地によって異なる。ドイツは1998年のレベルと同等であるが、表1に示したそのほかの出発国はいずれも増加している。これに関してより詳細な変化傾向をみると（図3）、最大市場であるドイツについては、宿泊数がほぼ同水準で維持されている。逆に東ヨーロッパの増加が顕著で、チェコとポーランドともに2008年頃まで指数が急激に増加しており、その後は増加はみられないもののほぼ一定レベルで維持されている。増加率は低いが同様の変化傾向を示すのはオランダである。一

表1 オーストリアにおける主要出発国からみた冬半期宿泊数の変化（1998年・2013年）

出発国	1998	2013
ドイツ	24,691	25,620
オーストリア	11,693	15,232
オランダ	3,761	5,491
イギリス	1,186	2,128
スイス	1,122	2,084
ベルギー	947	1,483
チェコ	366	1,359
ロシア	*	1,355
デンマーク	462	1,031
ポーランド	482	1,024
イタリア	888	1,016

*) ロシアの1998年データはなし（2005年以降はデータ有り：同年は386千泊）。

単位：1,000泊

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）

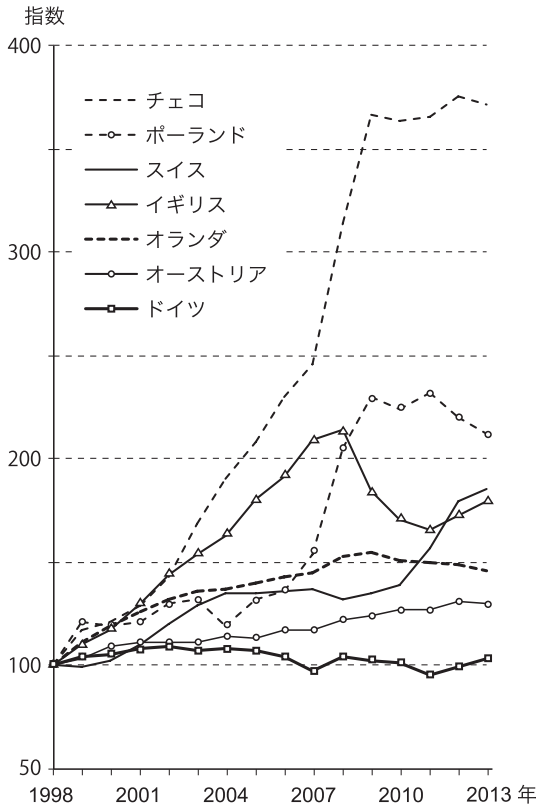


図3 オーストリアにおける主要国からの冬半期宿泊数の変化 (1998 - 2013年)

指数は1998年の冬半期宿泊数の値を100とした指数で、2013年冬半期宿泊数が100万泊超の主要国のみを表示。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich (年刊)

方、イギリスは、2008年まで増加傾向にあったものの、英ポンドとユーロの通貨為替レートの悪化のために (Statistik Austria, 2009) 急激に減少したが、その後は再び回復している。さらに近年目立っているのはスイスの急激な増加である。最も増加率が大きいのはロシアであり (表1)、その平均消費額がかなり多いという特徴を有する。オーストリア観光局の調査³⁾によると、表1に示したような主要出発国のなかで、旅費を除いた1日当たりの消費金額 (2011年) は、チェコで89ユーロ、ドイツ94、オランダ96、イギリス127、スイス129であるが、それに対してロシアは155

ユーロと突出して多い。

Ⅲ オーストリアアルプスにおける主要スキーリゾートの変化特性

本章では主要スキーリゾートの発展にみられる諸特徴について、宿泊数、施設数、出発地などのさまざまな側面から分析していく。

1. 主要スキーリゾートの分布とスキー場の特性

冬半期宿泊数上位30位のスキーリゾートの地域的分布をみると (図4)、オーストリア西部に集中し、また全てがオーストリアアルプス内に存在する。チロル州が最も多い16カ所を有し、ザルツブルクが9カ所となっており、この2州で大半を占める。ほかにはフォアアールベルク州3カ所、ケルンテン州2カ所である。表2は、これらのスキーリゾートの概要をまとめたものである⁴⁾。

個々のスキーリゾートの位置と冬半期宿泊数変化に注目すると (図4)、大規模なスキーリゾートで発展傾向にあるのは、ゼルデン (図5) [表2中の1]、サールバッハヒンターグレム [2] (以下、サールバッハ)、イシュグル [3] である。そのほかは、チロル州の南部とザルツブルク州に存在する。一方、チロル州北東部のキッツビューエル [22] とキルヒベルク [20]、またフォアアールベルク州のレッヒ [7] は停滞傾向にある。さらに、減少を示しているのは、ミッテルベルク [8]、ゼーフェルト [21]、パートクラインキルヒハイム [23] の3カ所のみであり、前2者はいずれもドイツとの国境の近隣に位置する。

スキー場の特徴をみるうえで垂直方向の分布を検討することも重要である。輸送能力2万人/h以上のスキー場のみについて、最高点と最低点を結んだ垂直分布と冬半期宿泊数の変化とを示した図6で検討する。まず、スキー場の標高が高いと発展傾向にあること、また輸送能力からみて大規

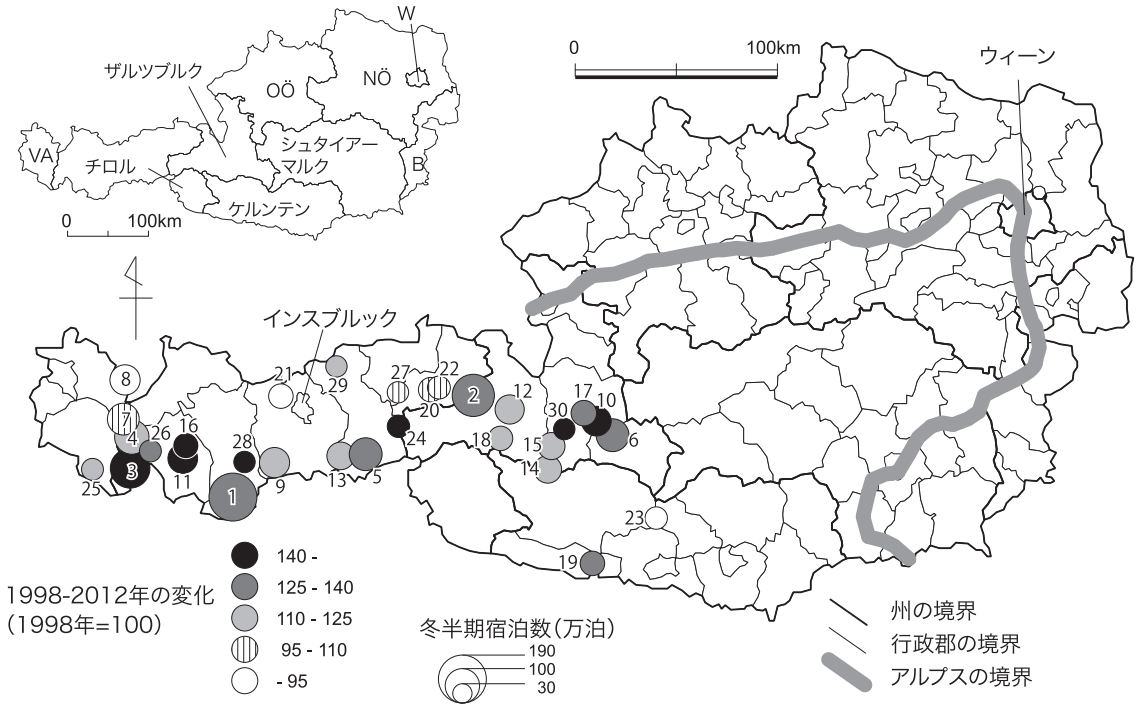


図4 オーストリアの主要スキーリゾートの分布と冬半期宿泊数変化 (1998-2012年)

1998年データは1997-1999年の3年平均、2012年データは2011-2013年の3年平均。

図中のスキーリゾート番号は表2に対応。

州の名称は、B: ブルゲンラント、NÖ: ニーダーエスターライヒ、OÖ: オーバーエスターライヒ、VA: フォアアールベルク、W: ウィーン。

資料: Statistik Austria: Tourismus in Österreich (年刊)

模であれば発展傾向にあることが把握される。たとえば、ゼルデンにはSölden (最上部は氷河スキー場 (図7)) およびObergurgl-Hochgurglという二つのスキー場があり、標高も高くまた標高差も大きい。逆に、衰退傾向にあるスキー場の標高は低く、標高差も小さいことがわかる (たとえば、ミッテルベルク)。一方、スキー場の標高が低い場合には、複数のゲマインデの連携によって大規模スキー場が形成される例がみられ、そこでは発展傾向がみられる。

2. 主要スキーリゾートにおける宿泊数の諸特徴

既述のように、主要スキーリゾートのベッド

総数には、最近約15年間で大きな変化はみられないものの、図8をみると半数近くのリゾートでベッド数は減少している。とくに、ミッテルベルクとヴィルトシェーナウ[27]では2割以上の減少がみられ、また伝統的なリゾートとしての名声を有するキッツビューエル (図9) やゼーフェルトも減少を示している。一方、増加がみられるのは、チロル州西部のイシュグル付近 (イシュグル、ザンクトアントン[4]、ゼルファウス[11] など) と、ザルツブルク州に集中する。さらにゼルデンとツィラータール (マイヤーホーフェン[5]、トゥックス[13]、ゲルロス[24]) でもやや増加している。

表2 オーストリアにおける主要スキーリゾートの概要

ゲマインデ (本文での表記)	ゲマインデ (原語表記)	州	スキー場名称	スキー場の標高 (m)			輸送能力 (Pers./h)	コース長 (km)	注
				最低点	最高点	標高差			
1 ゼルデン	Sölden	Tirol	Sölden	1,377	3,340	1,963	70,000	148	
			Obergurgl-Hochgurgl	1,800	3,080	1,280	39,400	110	
2 サールパッハ	Saalbach-Hinterglemm	Salzburg	Skircircus	1,003	2,200	1,197	96,000	200	Leogangと共通エリア
3 イシュグル	Ischgl	Tirol	Ischgl-Samnaun	1,377	2,872	1,495	84,935	218	
4 ザンクトアントン	Sankt Anton am Arlberg	Tirol	Ski Arlberg	1,304	2,811	1,507	60,666	128	
5 マイヤーホーフエン	Mayrhofen	Tirol	Zillertal 3000	630	2,500	1,870	64,820	141	Finkenbergと 共通エリア
			Ahorn	630	1,965	1,335	6,770	18	
6 オーバータウエルン	Obertauern	Salzburg	Obertauern	1,630	2,313	683	46,058	100	
7 レッヒ	Lech	Vorarlberg	Lech-Zürs	1,435	2,444	1,009	49,822	122	
8 ミッテルベルク	Mittelberg	Vorarlberg	Kanzelwand/Fellhorn	920	2,037	1,117	20,100	22	
			Ifen Sportgebiet	1,280	2,030	750	4,600	24	
			Walmedinger Horn	1,220	1,950	730	5,130	9	
9 ノイシュティフト	Neustift im Stubaital	Tirol	Stubai Gletscher	1,750	3,210	1,460	38,000	110	
			Elferbergbahn	980	2,100	1,120	4,000	7	
10 フラハウ	Flachau	Salzburg	Flachau-Wagrain	920	2,000	1,080	71,000	202	Wagrainと共通エリア
11 ゼルファウス	Serfaus	Tirol	Serfaus-Fiss-Ladies	1,429	2,828	1,399	85,000	190	Fiss/Ladiesと 共通エリア
12 ツェルアムゼー	Zell am See	Salzburg	Schmittenhöhe	757	2,000	1,243	45,099	77	
13 トゥックス	Tux	Tirol	Hintertuxer Gletscher	1,493	3,250	1,757	36,800	86	
14 バートガスタイン	Bad Gastein	Salzburg	Schlossalm-Angertal- Stubnerkogel	845	2,300	1,455	33,711	93	Bad Hofgasteinと 共通エリア
			Graukogel	1,079	2,007	928	3,348	14	
			Sportgastein	1,585	2,650	1,065	5,901	19	
15 バートホーフガスタイン	Bad Hofgastein	Salzburg	Schlossalm-Angertal- Stubnerkogel	845	2,300	1,455	33,711	93	Bad Gasteinと 共通エリア
16 フィース	Fiss	Tirol	Serfaus-Fiss-Ladies	1,438	2,828	1,390	85,000	190	Serfaus, Ladiesと 共通エリア
17 ヴァグライン	Wagrain	Salzburg	Flachau-Wagrain	850	2,000	1,150	71,000	202	Flachauと共通エリア
18 カプルン	Kaprun	Salzburg	Kitzsteinhorn	900	3,029	2,129	32,985	41	
			Maiskogel	800	1,675	875	7,000	20	
19 ヘルマゴール	Hermagor-Pressegger See	Kärnten	Nassfeld-Hermagor	600	2,002	1,402	45,000	110	
20 キルヒベルク	Kirchberg in Tirol	Tirol	Kitzbühel-Kirchberg	800	2,000	1,200	96,500	170	Kitzbühelと共通エリア
21 ゼーフェルト	Seefeld in Tirol	Tirol	Olympiaregion Seefeld	960	2,100	1,140	32,700	49	
22 キッツビューエル	Kitzbühel	Tirol	Kitzbühel-Kirchberg	800	2,000	1,200	96,500	170	Kirchbergと共通エリア
23 バートクラインキルヒハイム	Bad Kleinkirchheim	Kärnten	Skiregion BK/t.Oswald	1,078	2,055	977	33,500	103	
24 ゲルロス	Gerlos	Tirol	Zillertal Arena	1,250	2,500	1,250	84,400	166	Waldと共通エリア
25 ザンクトガレンキルヒ	Sankt Gallenkirch	Vorarlberg	Silvretta-Montafon	900	2,430	1,530	66,567	131	Gaschurn, Schruns と共通エリア
			Gargellen	1,423	2,300	877	9,000	38	
26 カップル	Kappl	Tirol	Kappl	1,250	2,690	1,440	13,318	40	
27 ヴァイルトシュエーナウ	Wildschönau	Tirol	Ski Juwel	870	2,025	1,155	32,000		Alpbachと共通エリア
28 レンゲンフェルト	Längenfeld	Tirol							スキー場なし
29 エーベン	Eben am Achensee	Tirol	Rofan	930	1,834	904	3,540	14	
			Zwölferkopf	960	1,510	550	2,400	14	
30 グロースアルル	Großarl	Salzburg	Skischaukel Großarlal-Dorfgastein	920	2,033	1,113	30,000	82	

資料：Fritz und Fettner (2013) および Statistik Austria: Tourismus in Österreich (年刊)



図5 ゼルデンの中心部北側（2013年8月）

ゲマインデ・ゼルデンはイン川の支谷で南北にのびるエッツ河谷 Ötztal にある。中心部地区のゼルデンでは谷底部に宿泊施設等が集積し、西側斜面にスキー場がひろがる。

主要スキーリゾートにおける冬半期宿泊数の増加には、4・5星施設の増加が大きく寄与していることはすでに指摘した。多くの大規模スキーリゾートで後者の値は1.5から2倍に増加し、とくに、イシュグル（図10）での増加が目立っている（図11）。そのほか、ザルツブルク州のフラッハウ[10]やグロースアルル[30]、オーバータウエルン[6]、チロル州のゲルロスやゼルファウスで大きな増加がみられる。これらのリゾートは、もちろん全宿泊施設における宿泊数の増加も顕著であり（図4）、どちらかというと比較的新しく発展してきたスキーリゾートと位置づけられる。つまり、そうしたリゾートでは、高級施設の整備が、近年、急速に進んできたのであろう。逆に停滞傾向にあるのは、ゼーフェルト、ヘルマゴール[19]、バートクラインキルヒハイムなどである。

このように高級施設における宿泊数の増加がみられるが、2012年（3年平均）の時点でその位置づけを地域的に検討する（図12）。いわゆる高級スキーリゾートとして認識される、レッヒ、ゼーフェルト、キッツビューエルに加えて、オーバータウエルンにおいて、4・5星施設における冬半

期宿泊数の割合が50%を超えている。そのほか、表2の上位に掲載されたスキーリゾートのなかでは、イシュグル（42%）やノイシュティフト[9]（40%）、ゼルデン（37%）、マイヤーホーフエン（34%）で値が高い。これに続くのはサールバッハとザンクトアントン（ともに29%）である。

さらに宿泊施設としては、アパートメントの増加も目立つ。既述の図2では、10ベッド以下のアパートメントの宿泊数が増加傾向にあることが指摘された。この小規模アパートメントの割合は、30カ所の主要スキーリゾート全体では15%に達する（2012年（3年平均））が、カップル[26]では51%を占めている。また図2の「その他」には、11ベッド以上のアパートメントが含まれる。これには、それ以外の宿泊施設における宿泊数も含まれているが、主要スキーリゾート全体での割合は17%に達する。この割合が30%程度を示すのは、ゼルファウス（34.5%）、ヴァグライン[17]（32.1%）、フィース[16]（29.7%）、フラッハウ（28.8%）である。いずれも、近年著しく発展してきたリゾート（図4）である。

最後に宿泊数の季節性について言及する（図13）。一部のリゾートでは、極端に冬半期に集中する傾向がみられる。すなわち、ゲマインデ・ゼルデン内のオーバーグルグル Obergurgl、ゲマインデ・レッヒ内のチュルス Zürs、ザンクトアントン、イシュグルでは、冬季のスキー客に大きく依存している。とくに、チュルスのほぼ全ての宿泊施設、オーバーグルグルの半数近くの宿泊施設は、冬季のスキーシーズンのみ営業し、他の季節は基本的に休業状態にある。逆に夏半期宿泊数が半数以上を占めるのは、図中の南部と北部に存在する。宿泊数が減少傾向にある、北部のミッテルバルクとゼーフェルト、アッヘン湖畔のエーベン、プレセック湖をもつヘルマゴールである。それ以外では、チロル州でほとんどが冬半期の割合が60%台

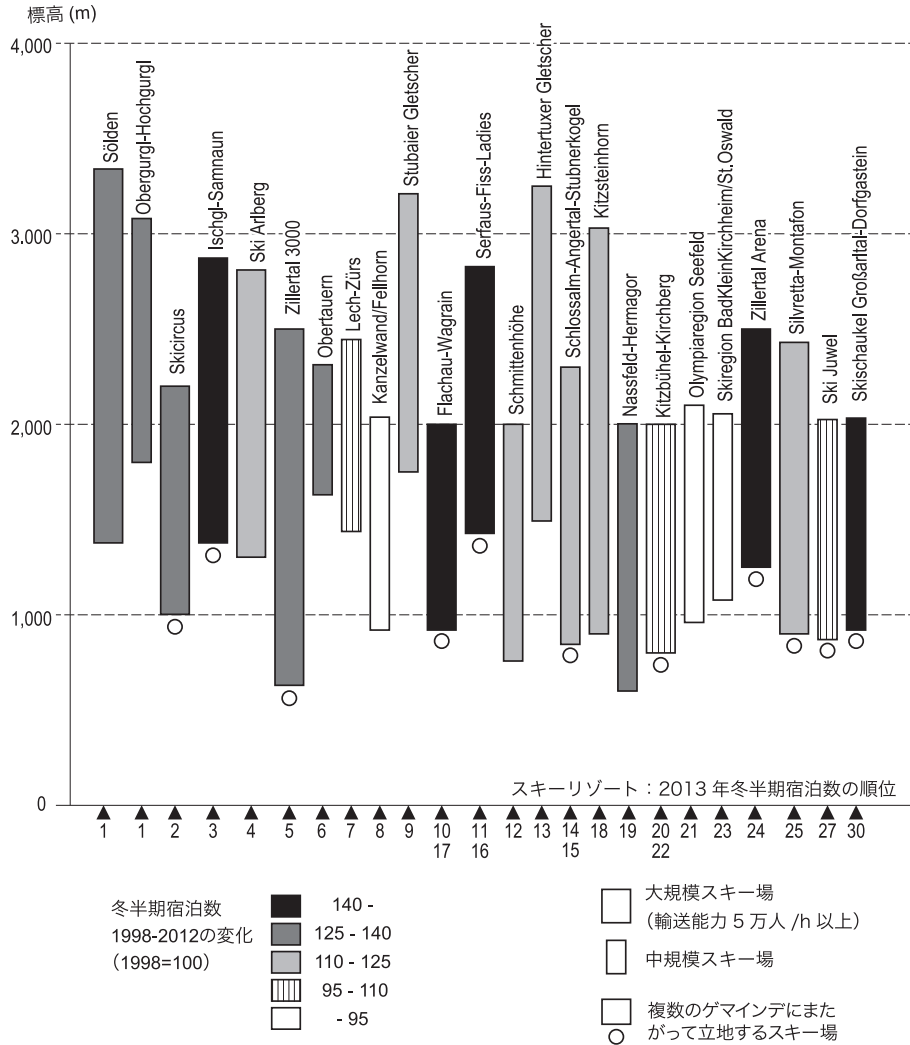


図6 オーストリアの大規模スキー場の垂直分布と冬半期宿泊数変化(1998-2012年)
 1998年データは1997-1999年の3年平均、2012年データは2011-2013年の3年平均。
 複数のゲマインデにまたがって立地するスキー場については、最大宿泊数のゲマインデの宿泊数変化を表示。
 索道輸送能力20,000人/h以上のスキー場のみ表示。
 アルファベットはスキー場の名称で、X軸のスキーリゾート番号は表2に対応。
 資料：Fritz und Fettner(2013) および Statistik Austria: Tourismus in Österreich (年刊)

であるのに対し、ザルツブルク州ではばらつきが大きい。すなわち、冬半期に集中するサルパッハやオーバータウエルンに対して、湖畔のツェルアムゼー[12]、温泉地のバートガスタイン[14]な

どでは夏半期の割合もある程度に達する。

3. 顧客圏からみた特徴

既述のようにオーストリアのスキーリゾートで



図7 ゼルデンの氷河スキー場（2014年2月）

ゼルデン中心部の南西約7kmに末端（標高約2,700m）のあるレッテンバッハ氷河では、1975年にスキー場開発がなされた。雪不足のため、滑降コースに人工降雪機が設置されている。

は、ドイツ人の安定した滞在がみられることに加えて、その他の主要出発国からの冬半期宿泊数が大きく増加してきた。ところが、それぞれの出発国から滞在地をみると、それぞれ特定のスキーリゾートを目的地としている傾向がある。

一般に、ヨーロッパの人びとは、バカンスを利用してスキーリゾートのみならずリゾートに滞在する。リゾートの定義には「高リピート性」、つ

まり足繁く通うという要素が含まれるように、多くの人びとは毎年同じリゾート目的地とする傾向が強い。

出発国別に冬半期宿泊数の上位5位を検討すると（表3）、大規模なスキーリゾートが多くを占めている。都市観光地の目的地を除くと、表2で上位にあるゼルデンやサルバツハ、イシュグルは多くの出発国の目的地となっている。しかし、出発国ごとにより異なった傾向もみられる。その一つは近接効果が作用したものである。ドイツのミッテルベルク、スイスのゼルファウスとフィース、ハンガリーのシュタイアーマルク州の諸スキーリゾートがそれに該当し、いずれも隣接国から到達しやすいスキーリゾートと位置づけられる。さらにはチェコとポーランドが、ともにノイシュティフトとカプルンを含むといった、東ヨーロッパの共通性もみられる。ちなみに、ノイシュティフトとカプルンはいずれも氷河スキー場を有し、積雪の確実性や雪質の良さが評価されていると考えられる。また、デンマークのヴァグライン、イギリスのザンクトアントン、ロシアのマイヤーホーフエンのように、1国による冬半期宿

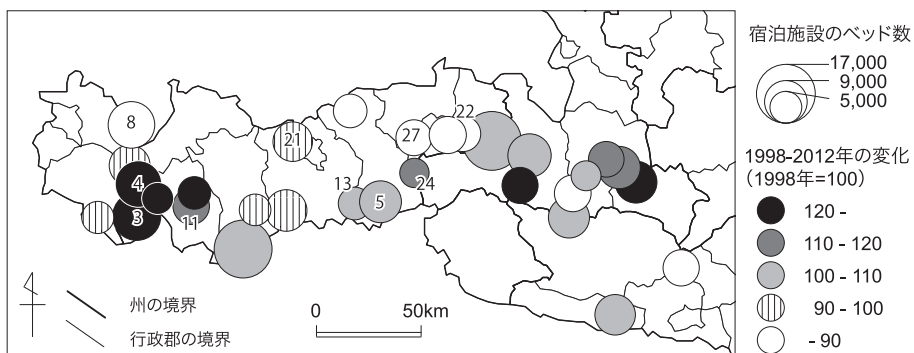


図8 オーストリアの主要スキーリゾートにおける宿泊施設ベッド数（冬季）の変化（1998-2012年）

1998年データは1997-1999年の3年平均、2012年データは2011-2013年の3年平均。

図中のスキーリゾート番号（表2に対応）は本文で言及したもののみ表記。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）



図9 キッツビューエルの中心部（2014年7月）

伝統的な高級スキーリゾートであるキッツビューエルは、スキーの名手ザイラーの故郷としても有名である。その中心部には高級な商業施設が集積し、郊外部に高級ホテルが点在する。



図10 イシュグルの高級宿泊施設群（2013年8月）

教会を中心とした小規模農村であったイシュグルには、2014年現在400軒あまりの宿泊施設が存在するが、そのうち約85軒が4・5星のホテルである。

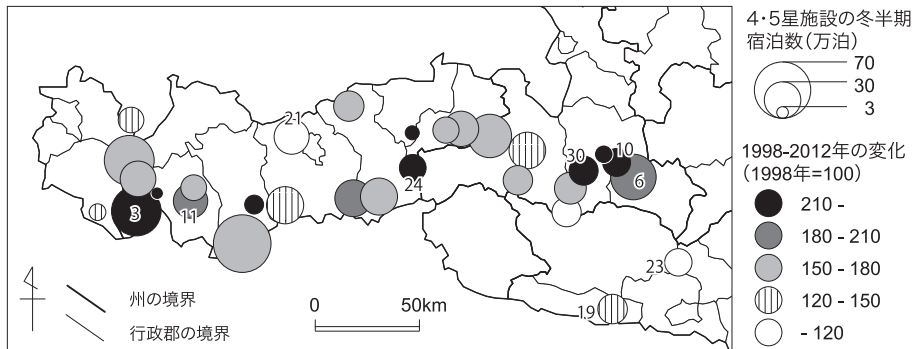


図11 オーストリアの主要スキーリゾートにおける高級宿泊施設（4・5星施設）の冬半期宿泊数変化（1998 - 2012年）

1998年データは1997-1999年の3年平均、2012年データは2011-2013年の3年平均。

図中のスキーリゾート番号（表2に対応）は本文で言及したもののみ表記。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）

泊数の10%程度以上が1カ所のスキーリゾートに集中する例もある。つまり、近接効果や積雪の確実性、知名度、さらには宣伝効果、嗜好などによって出発国による目的地がある程度集中する傾向がみられる。さらに、これを助長する一因は、先述のような好みのリゾートに繰り返し訪問するという行動パターンにあると考えられる。

これに関連して、出発地によって宿泊施設の嗜好も異なっていることも重要である。表3で冬半

期宿泊数の宿泊施設別割合をみると、スイス、ロシア、イギリスのように高級なホテルを好む出発国がある。逆に、アパートメントでの宿泊数割合が大きいのはポーランド、オランダ、チェコ、デンマークで、伝統的に自炊しながらの長期滞在を好むオランダ人、経済的な理由でアパートメント滞在を志向する東ヨーロッパ（Kureha, 2004）といった性格を反映したものであろう。

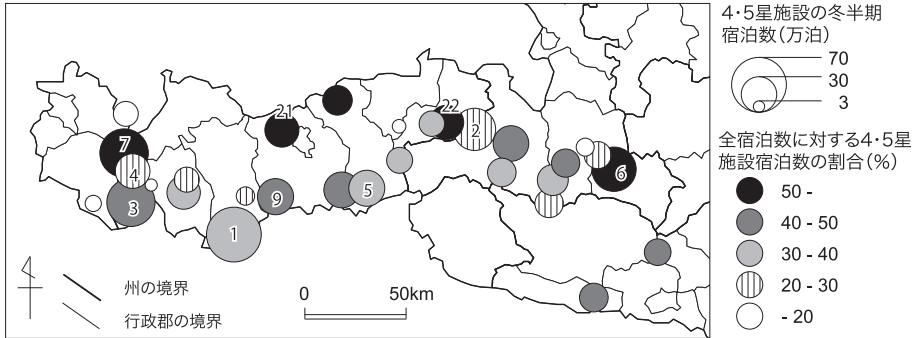


図12 オーストリアの主要スキーリゾートにおける高級宿泊施設（4・5星施設）の冬半期宿泊数（2012年）

データは2011-2013年の3年平均。

図中のスキーリゾート番号（表2に対応）は本文で言及したもののみ表記。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）

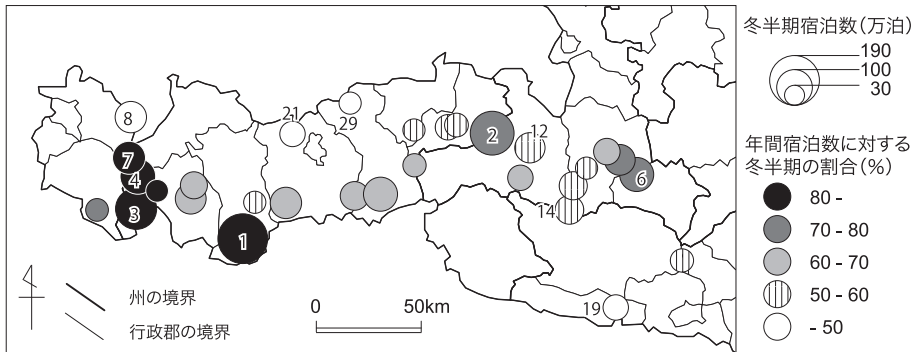


図13 オーストリアの主要スキーリゾートにおける冬半期宿泊数の割合（2012年）

データは2011-2013年の3年平均。

図中のスキーリゾート番号（表2に対応）は本文で言及したもののみ表記。

資料：Statistik Austria: Tourismus in Österreich（年刊）

IV オーストリアアルプスにおける大規模スキーリゾートの継続的発展の諸要因

前章の結果、オーストリアアルプスでは、上位30位のなかでもとくに大規模なスキーリゾートで継続的な発展傾向がみられることが示された。冬半期宿泊数上位のスキーリゾートの順位はほとんど変更なく、ほぼそのままの順位でそれぞれの宿泊数増加が進んできた。それらは大規模なス

キー場を持ち、また標高の高い地域にまでスキー場が展開している。一方で、停滞傾向からやや減少傾向を示す例外が若干みられた。それはミッテルベルクとゼーフェルトというスキー場規模の小さいスキーリゾートであり、スキー場の最高到達点の低いキッツビューエルとキルヒベルク、また以前より高級化の傾向が強かったレツヒなどであった。以下では、継続的な発展をもたらした要因を検討する。

表3 オーストリアにおける主要出発国の宿泊数上位のゲマインデ (2013年)

	年間宿泊数 (2013)	宿泊数上位5位のゲマインデ (2013年) (%)								施設別宿泊数割合 (2013) (%)		
		1	2	3	4	5	4・5星	3星	アパート			
ドイツ	25,619,724	Wien 3.8	ゼルデン 3.5	ミッテルベルク 2.6	イシュグル 2.5	ザールンバッハ 2.3				31.7	20.8	13.1
オーストリア	15,232,030	Wien 7.2	Salzburg 2.2	バートホーフガ スタイン 1.7	ザールンバッハ 1.7	Bad Tatzmanns- dorf (B.) 1.6				42.1	20.0	4.1
オランダ	5,490,610	ザールンバッハ 4.5	ゲルロス 3.7	ゼルデン 3.5	フツラハウ 2.8	フィース 2.7				18.1	17.6	18.4
イギリス	2,127,524	ザンクトアントン 11.5	Wien 8.8	ゼルデン 6.4	マイヤーホー フェン 6.2	ザールンバッハ 4.7				48.7	21.3	6.3
スイス	2,083,986	Wien 8.0	ゼルフアウス 5.0	イシュグル 4.6	ゼルデン 3.6	フィース 3.5				60.3	16.6	6.2
ベルギー	1,483,257	ゼルデン 6.6	イシュグル 4.0	Wien 3.2	ザールンバッハ 3.1	マイヤーホー フェン 2.8				40.2	22.9	9.5
チェコ	1,359,434	Wien 4.7	ヘルマゴール 3.9	ノイシュティフト 2.6	カブルン 2.5	バートクラインキ ルヒハイム 2.2				19.6	19.7	17.7
ロシア	1,355,433	Wien 27.1	マイヤーホー フェン 9.5	ゼルデン 8.6	イシュグル 4.7	ツェルアムゼー 4.6				48.9	22.8	8.8
デンマーク	1,031,460	ヴァグライン 15.5	バートガスタイン 7.0	ゼルデン 5.7	ザールンバッハ 5.6	ザンクトアントン 4.5				22.3	25.4	16.8
ポーランド	1,024,494	Wien 5.6	ノイシュティフト 4.0	ゼルデン 3.1	カブルン 2.5	レンゲンフェルト 2.3				19.5	22.0	21.0
イタリア	1,016,014	Wien 31.2	Innsbruck 6.5	Salzburg 5.6	ゼーフェルト 3.1	バートクラインキ ルヒハイム 3.1				42.2	25.8	6.6
ハンガリー	990,790	St.Georgen ob Murau (St.) 7.8	Wien 7.2	Schönberg- Lachtal (St.) 4.1	ヘルマゴール 3.1	バートクラインキ ルヒハイム 2.9				20.7	23.3	9.4

アルファベットのイタリック体は、都市またはスキー場をもたない温泉地、それ以外は表2に含まれないスキーリゾート
B.はブルゲンラント州、St.はシュタイアーマルク州。

資料：Österreich Werbung: Marktinfo (各国版)

1. 地形との係わり

大規模で標高の高いスキー場をもつスキーリゾートが発展傾向にあることに関係する条件として、まず地形条件がある。オーストリアアルプスは、国土中西部の大部分を占める(図4)。チロル州付近では地質構造の異なる山脈が東西方向に延びており、インスブルックを東西に走るイン川(図14)を挟んでほぼ北側が北アルプス、南側が中央アルプスとされる。北アルプスは主に石灰岩質であり、侵食が進んで標高の低い山地が多く、スキー場の規模も小さい。ゼーフェルトやキッツビューエル、キルヒベルクなどはこの山脈に位置する。一方、中央アルプスは主として結晶岩質からなるために侵食が比較的進んでおらず、標高の高い山地が連続する。またその高標高地域には氷河が存在し、複数の氷河スキー場もみられる。標高が高いことで、標高差の大きい滑降コースを有する大規模なスキー場が立地する可能性が高く、気温が低いために雪質がよく、多くの積雪が期待される。さらに、温暖化傾向下で少雪が生じたと

しても、海拔高度が高いとより低温になり、人工降雪によって積雪をつくりだすことができる。

こうした地形条件の有利性は、スキーヤーの技術とも関係している。スキーヤーが大規模なスキー場を求める傾向は、すでに1960年代や1970年代頃からみられた。しかし、1990年代後半以降、スキー用具の進化が急激に進み、この傾向が強まっていると思われる。カービングスキー板の出現によって、圧雪車によって整地されたスキーコースを、高速で快適に滑降することが可能になった。それゆえ、スキーヤーはより長い距離の斜面を快適に滑降することを求めている。一方、これとは逆の動きとして、圧雪されていない新雪斜面を滑降する専用のスキー板も現れてきた。その結果、さまざまな性格の斜面を有する大規模なスキー場が求められているといえよう。

もちろん、地形的な条件によってスキー場を標高の高い領域へと拡大できない場合もある。しかし、その場合には水平的に拡大させる工夫がみられる。つまり隣接するスキー場と物理的にスキー

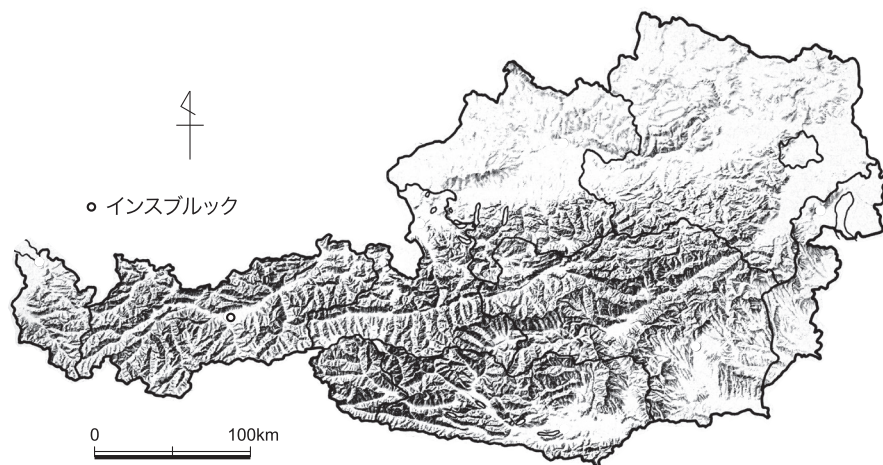


図14 オーストリアの地勢

図中の境界は州の境界。

資料：Leidlmaier (1986) (筆者改変)

リフトで結んだり、シャトルバスで結んだりして、周囲の複数のスキー場とともに広域の「スキーエリア」を形成する例が多くみられる。共通リフトによって、スキーヤーは滞在中にさまざまな斜面を滑降することができるのである。

地形条件がスキーリゾート発展と関係する意味は時代とともに異なっている。Kureha (1995) は、1990年頃までのオーストリアにおいて、スキーリゾートの最も重要な発展要因として地形条件を指摘した。地形条件のもとで標高差の大きいスキー場の開発が可能であったことが強調された。ところが、近年では、地形条件に基づいて標高の高いスキー場が存在することが、積雪の可能性、人工降雪機の利用可能性を高めている。このように地形条件の意味は、近年異なってきた。また、前述した複数のスキー場の連結は、限られた地形条件を克服した例と考えられる。

2. 施設の変化：高級化

オーストリアアルプスにおいて継続的に発展し

ているスキーリゾートでは、4・5星施設における冬半期宿泊数が著しく増加し、全宿泊施設に占める割合も高まっている。しかし、ほとんどのスキーリゾートで、宿泊数の増加に比べ、宿泊施設のベッド数の増加分はかなり小さい。つまり、宿泊施設のベッド数からみた規模はさほど変化していないが、その構成内容が変化しているのである。具体的には、高級な宿泊施設である4・5星施設やそのベッド数の比率に増加がみられると考えられる。またアパートメントにおける宿泊数も継続的に増加しており、流行に対応した施設整備も継続的に進行している。

つまり、大規模スキーリゾートでは、高級な宿泊施設が増えたことによって、全体として高級化が進行していると考えられる。それは、とくにイシュグルで顕著にみられ、そのほか、ザルツブルク州のフラッハウ、チロル州のゲロスなど、最近の発展が著しいスキーリゾートが該当した。これらのスキーリゾートでは、全般的な傾向としてはベッド数が停滞しているのに対して、その数値

が継続的に増加しており、その増加分の多くは高級な宿泊施設で生じていると考えられる。

一方、いわゆる高級スキーリゾートとして認識される、レツヒ、ゼーフェルト、キッツビューエルに加えて、ミッテルベルクでは、4・5星施設における冬半期宿泊数は増加しているものの、全宿泊施設の冬半期宿泊数は、分析期間では停滞もしくは減少を示している。つまり、1990年代前半の時点で、もしくはそれ以前の時期においてすでにある程度高級化が進んでいたスキーリゾートでは、近年、高級化施設での冬半期宿泊数の増加がみられない。すなわち、そこではすでに高級化施設自体が飽和しており、拡大が困難な状況にあると考えられる。

リゾート内では、サービス業の充実が顕著である。飲食店では、スキーの後で夕方からビール等を飲んで楽しむ、アプレスキー（Après-skiアフタースキー）施設（図15）の増加が著しい。2013/14年度シーズンにオランダで刊行された、ヨーロッパで最も詳細と認識されるスキー場ガイドブック（Snow Plaza, 2013）によると、アプレスキーからみて推薦されるスキーリゾートとして5カ所があげられ、そのうちオーストリアが4カ所を占める（イシュグル、ゼルデン、サールバッハ、ゲルロス）。また、スポーツ店が増えていることも特徴である。一方、スキー場内ではスキーリフトやレストラン等の施設更新がさかに行われ、また、前述のように人工降雪機の設置増加が進んでいる。つまり、スキー場における施設更新などの開発は継続的になされている。

3. 顧客の多様化

すでに述べたように、オーストリアのスキーリゾートで伝統的顧客であり続けてきたドイツ人については、その冬半期宿泊数は停滞傾向にある。一方、ドイツ以外の顧客圏からの冬半期宿泊数

は、変化に波はあるものの、継続的に増加する傾向にある。この増加が、近年のスキーリゾートの継続的な発展をもたらしている。とくに、スイスとイギリス、さらに東ヨーロッパ諸国（チェコとポーランド、ロシア）からの滞在者増加が目立っており、さらにオランダからのスキーヤーの訪問も安定して増えつつある。その結果、オーストリアのスキーリゾートにおける顧客圏は多様化している。

ただし、個々のスキーリゾートにおいて顧客圏の多様化がみられる一方で、出発国ごとに好みのスキーリゾートが存在する。特定の顧客が、特定のスキーリゾートに好んで滞在しており、そこではスキーリゾートがもつ何らかの特徴が選好条件となっていると考えられる。すでに、近接性や積雪の確実性、知名度、宿泊施設の種類の構成などが影響することは指摘した。前述のようなアプレスキー施設の充実する目的地が好まれることも重要であろう。つまり、停滞しているスキーリゾートを除いて、継続的に発展しているリゾートでは、さまざまな国からの顧客を受け入れるようになり、さらには特定の国からの顧客を継続的に受け入れることで、発展傾向を続けている。これを助



図15 ゼルデンのアプレスキー施設（2014年2月）
午後早めに滑り終えたスキーヤーが続々と集まってくる。ガラス張りのアプレスキー施設が増えており、スキーヤーはビールやワインと軽食で楽しんでいる。

長しているのは、ヨーロッパ人の間に根付いている、好みのリゾートに繰り返し訪問するという行動パターンである。

スキーは、比較的消费額の多いレクリエーションである。それゆえに、EU諸国の一部で経済が安定しているといった条件は重要である。さらに、東欧革命後20年が経過し、東ヨーロッパでは、国内の個人較差や都市と農村の較差が強調されるものの、経済が発展している。オーストリアの言語がドイツ語であることも、最大市場のドイツ人やスイス人には大きな魅力であり、また英語も通じやすい。

4. アルプスにおけるオーストリアのスキーリゾート

地球上でスキーリゾートは偏在している。ヨーロッパというスケールでも、ある程度の規模のスキーリゾートは高山に集中して立地する。なかでも、アルプスは山岳規模が大きいこと、EUの人口集積地域からの近接性が良いことなどで、他の山地に比べて優位である。しかし、Vanat (2014)によると、スイスではスキー場訪問者数は最近10年間減少傾向にある。同様に、フランスやイタリアでも停滞し、この数値ではオーストリアでも停滞傾向にある。データの性格は異なるものの、本研究はオーストリアのスキーリゾートにおける冬半期宿泊数が増加していることを示した。ただし、全てのスキーリゾートで増加が著しいわけではなく、停滞または衰退しているリゾートも存在した。

近年のアルプスにおけるスキーリゾートは、多様な施設やサービスに基づいてスキーを「楽しむ」ことのできる空間としての性格を強めている。このように、多様な「楽しみ方」に対応するかたちでサービス展開していることは、宿泊施設の高級化が進んでいること、さらにはアプレス

キーやスキー場内施設の更新が活発であることに反映されている。しかし、これらの特性はアルプスに位置する多くの国のスキーリゾートでも当てはまるであろう。

前述のように、オーストリアにおけるスキーリゾートの発展要因として地形条件は重要である。しかし、アルプスのなかで、オーストリアの山地標高は、相対的に低位である。それゆえ、オーストリアのスキー場の標高は、スイス、フランスおよびイタリアのそれと比べて低く、今後、地球温暖化のもとで気温が摂氏数度上昇すると、積雪の確実性はかなり低下することが予測されている (Abegg *et. al.*, 2007)。気温が高いと人工降雪の効率も悪くなり、これらの点では、オーストリアのスキーリゾートは相対的に不利である。

オーストリアアルプスにおいて、一部とはいえ、複数のスキーリゾートが発展している事実には、何らかの優位性が作用していることは疑いない。オーストリアの魅力の一つは、まずその価格に見いだすことができる。周知の通り、スイスの物価は高く、スキーリゾートでも宿泊のみならず、飲食やさまざまなサービスが高価である。フランスのスキーリゾートもそれに近い状態であろう。それに対して、オーストリアでは比較的安価な滞在が可能である⁵⁾。大きく発展しているスキーリゾートでは、高級化が急激に進行しているが、依然として比較的安価である。逆に、滞在が比較的高価である高級リゾート (レッチャやキッツビューエル) で停滞傾向が続いている。

第2に、重要な顧客であるドイツ、スイス、東ヨーロッパ諸国からの近接性も作用している。スキーリゾートが多く存在するアルプスにおいて、オーストリアは外国人宿泊客が卓越するという特徴を有する。ちなみに、スキー場訪問者数で外国人が占める割合は、スイスで50%、フランス32%、イタリア15%、ドイツは10%である一

方で、オーストリアでは66%に達する (Vanat, 2014)。スイスなどでは、個々のスキーリゾートで外国人宿泊客が卓越する例も存在するであろうが、外国人スキーヤーを惹き付ける魅力が、オーストリアのスキーリゾートには備わっている。

第3点は、リゾートの発展プロセスに関するものである。オーストリアアルプスのスキーリゾートは、従来の農業集落を基盤に発展してきた (Barker, 1982)。また、Penz (1984) は、チロル (オーストリアのチロル州とイタリアの南チロル) のスキーリゾートでは、開発が集落域から徐々に標高の高い地点に向かって進行していくことを示した。ほとんどのスキーリゾートにおいて、宿泊施設や索道の経営は地元住民の資本による。それゆえ、徐々に安定した投資が続けられてきたために、継続的な発展がみられた。また、スイスでも同様に農業集落からの発展プロセスがみられるが、そこではオーストリアに比べると早くからそのプロセスが始まっており (河村, 2013)、バトラーモデル (Butler, 1980) でいう停滞状態に入り、すでに安定していると思われる。一方、オーストリアの一部のスキーリゾートでは、依然として発展の余地があるために、低価格やアプレスキーの魅力に基づいて外国人スキーヤーの訪問が増え続けていると考えられる。

V おわりに

本研究の目的は、オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的な発展にみられる諸特徴を、全国レベルでの分析に基づいて明らかにし、それらに係わる要因を探ることである。その結果は次のようにまとめられる。

オーストリアアルプスにおいては、豊富な山地資源に基づいてスキーリゾートが発展してきた。とくに1990年代半ば以降、海拔高度が高く、大規模なスキー場を有するスキーリゾートで継続的発

展がみられた。隣接するスキー場同士の結合による大規模化も進んでいる。そこでは、4・5星宿泊施設における宿泊数の増加が顕著で、施設の高級化が進んでいる。さらに、多様な施設やサービスに基づいてスキーを「楽しむ」ことのできる空間としての性格を強めている。しかし、伝統的な高級リゾートでは、停滞傾向にあった。

こうした発展を支えているのは、顧客の多様化である。ドイツやオランダという安定的な出発国に加えて、近接性に基づいてスイスや東ヨーロッパ諸国からの宿泊数が増加を示している。さらに、特定の出発国からの顧客が特定のリゾートを好み、さらには冬のバカンス目的地として繰り返し訪問していると思われる。これらの背景にあるのは、スキーリゾートでの滞在費用が、スイスなどと比べてオーストリアでは比較的安価であることである。

本研究では、オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの発展を、主として全国スケールで分析してきた。今後は、具体的なスキーリゾートの事例を詳細に分析することで、継続的発展要因がより明確になるとと思われる。

注

- 1) ゲマインデはオーストリアの最小行政単位である。2014年1月の時点で全国に2,354のゲマインデが存在する。ほぼ日本の市町村に相当するが、行政機能の面で大きく異なる。本稿ではゲマインデの表現で統一した。
- 2) アパートメントメント *Ferienwohnung* (休暇用住宅) の特徴については、呉羽 (2002) を参照されたい。
- 3) オーストリア観光局では主要な出発国からの宿泊客の特性を独自に分析している。その結果は、出発国別に公表されている。たとえば、スイスに関するデータは次のアドレスにある。<http://www.austriatourism.com/wp-content/uploads/2012/09/marktinfo-schweiz.pdf> [Cited 2014/09/30] .
- 4) ただし、主要スキーリゾートとはいえ、スキー場

の規模がかなり小さいエーベン[表2中の29]、スキー場はあるが隣接する大規模スキーリゾートのイシュグルに大きく依存するカップル[26]、スキー場が存在せず隣接する大規模スキーリゾートのゼルデンなどに大きく依存するレンゲンフェルト[28]もある。レンゲンフェルトでは、クロスカントリースキーを楽しむことが可能で、さらにエッツタールÖtztal北部のゲマインデ、エッツOetzのスキー場を訪れる宿泊客も存在する。

- 5) ホテル等の価格比較は困難であるが、スキーリフト価格(大人)を比べてみると、2014/15年シーズンで、スイスのサンモリッツは2日券が148フラン(123ユーロ)、ツェルマット146フラン(121ユーロ)、フランスのシャモニーでは116ユーロであるのに対して、オーストリアのゼルデンでは97.5ユーロ、サールパッハでは92.5ユーロである。

文 献

- 河村英和 (2013): 『観光大国スイスの誕生 - 「辺境」から「崇高なる美の国」へ』平凡社。
- 呉羽正昭 (2002): 1990年代のオーストリアにおける観光地域の変化 - 観光客数と宿泊施設からみた分析 -。愛媛の地理, **16**, 38-50.
- 呉羽正昭 (2009): 日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性。地理科学, **64**, 168-177.
- 呉羽正昭 (2014): アルプス地域のツーリズム - スイス・オーストリア・バイエルン -。山本健児・平川一臣編『中央・北ヨーロッパ(朝倉世界地理講座 - 大地と人間の物語 - 9)』朝倉書店, 278-290.
- Abegg, B., Agrawala, S., Crock, F. and de Montfalcon, A. (2007): Climate change impacts and adaptation in winter tourism. Agrawala, S., ed., *Climate change in the European Alps: Adapting winter tourism and natural hazards management*. OECD, 25-60.
- Barker, M.L. (1982): Traditional landscape and mass tourism in the Alps. *Geographical Review*, **72**, 395-415.
- Butler, R. (1980): The concept of a tourist area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer*, **24**, 5-12.
- Falk, M. (2010): A dynamic panel data analysis of snow depth and winter tourism. *Tourism Management*, **31**, 912-924.
- Falk, M. (2013): A survival analysis of ski lift companies. *Tourism Management*, **36**, 377-390.
- Fritz, G. und Fettner, F. (2013): *Skiguide Austria 2014*. Medianet.
- Kureha, M. (1995): *Wintersportgebiete in Österreich und Japan*. Selbstverlag des Instituts für Geographie der Universität Innsbruck, 188S.
- Kureha, M. (2004): Changes in outbound tourism from the Visegrad Countries to Austria. *Geographical Review of Japan*, **77**, 262-275.
- Kureha, M. (2008): Changing ski tourism in Japan: From mass tourism to ecotourism? *Global Environmental Research*, **12**(2), 137-144.
- Leidlmaier, A. (1986): Österreich -Allgemeiner Teil. Leidlmaier, A. (Hrsg.): *Landeskunde Österreich*, **2**. Auflage. List, 11-93.
- Penz, H. (1984): Stellung und Funktionswandel der Hochweidestufe in Tirol und im Trentino. Grötzbach, E. und Rinschede, G. (Hrsg.): *Beiträge zur vergleichenden Kulturgeographie der Hochgebirge*. Pustet, 305-325.
- Scott, D. (2006): US ski industry adaptation to climate change: Hard, soft and policy strategies. Gössling, C. and Hall, M., ed. *Tourism and global environmental change: Ecological, social, economic and political interrelationships*. Routledge, 262-285.
- Snow Plaza (2013): *Ski atlas: Wintersport 2014*. Spalder.
- Statistik Austria (2009): Wintersaison 2008/09: Mit 62,9 Mio. Nächtigungen stabil auf hohem Niveau; 14,5 Mio. Inländernächtigungen bedeuten neuen Rekord. http://statistik.gv.at/web_de/presse/036682 [Cited 2014/09/30].
- Steiger, R. (2011): The impact of snow scarcity on ski tourism: an analysis of the record warm season 2006/2007 in Tyrol (Austria). *Tourism Review*, **66**(3), 4-13.
- Steiger, R. and Mayer, M. (2008): Snowmaking and Climate Change: Future Options for Snow Production in Tyrolean Ski Resorts. *Mountain Research and Development*, **28**, 292-298.
- Steiger, R. and Stätter, J. (2013): Climate change impact assessment of ski tourism in Tyrol. *Tourism Geographies*, **15**, 577-600.
- Töglhofer, C., Eigner, F. and Pretenthaler, F. (2011): Impacts of snow conditions on tourism demand in Austrian ski areas. *Climate Research*, **46**, 1-14.
- Tuppen, J. (2000): The restructuring of winter sports resorts in the French Alps: Problems, processes and policies. *International Journal of Tourism Research*, **2**, 327-344.
- Vanat, L. (2014): *2014 International report on snow & mountain tourism: Overview of the key industry figures for ski resorts*. <http://www.vanat.ch/RM-world>

report-2014.pdf [Cited 2014/08/30] .

Continuous Development of Ski Resorts in the Austrian Alps

Masaaki Kureha

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

This study examines the continuous development of ski resorts in the Austrian Alps, through an analysis of their regional characteristics based on statistical data. In the Austrian Alps, continuous development is undertaken by those ski resorts that are located in higher altitudes and have large ski areas. During winter, the number of tourist nights is increasing every year, especially in luxury hotels (four and five stars hotels). The increase corresponds to the growth in the number of beds in these luxury hotels. Therefore, with facilities such as après ski, ski resorts tend to have distinctive options for skiers to enjoy a long holiday. However, some resorts show stagnation, especially traditional luxury resorts such as Kitzbühel and Lech. Location of the Austrian Alps plays an important role in continuous development of their ski resorts. This factor, in the last decade, has attracted many new skiers from neighboring countries such as Switzerland and the Czech Republic. In addition, there are a steady and sizeable number of skiers from Germany and the Netherlands. It is also a fact that skiers from specific locations prefer to stay at specific ski resorts. For example, many British skiers enjoy their winter holidays at St. Anton am Arlberg, in Tyrol. Inexpensive stay is one more factor that affects continuous development in the Austrian Alps, when compared with the Swiss or French Alps.

Keywords: ski resort, tourism, development process, Austria, the Alps